

# 死生観 医者は語れず

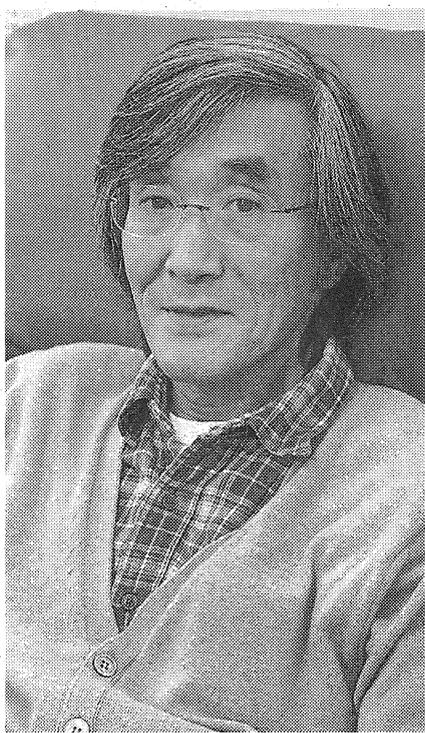
東日本大震災発生から間もなく1年。この間、宗教や信仰を基盤に、多くの人々や団体が被災者と向き合ってきました。「あの日から」なにを考へてきたのか、3回にわたって話を聞きます。まずは、仙台市を拠点に活動を続けてきた「心の相談室」の室長で、医師の岡部健さん(61)に、「なぜ宗教なのか」を聞きました。

——「心の相談室」は、震災後、宮城県の宗教者が宗教、宗派を超えて、身元不明の遺体の引いと遺族の相談を受けようと作ったのが始まりでした。それを後押ししたのは岡部さんだったそうですね。

「私は長年、終末期のがんの患者さんらを在宅で診療し、みてきてきました。患者さんの必要に

に応じて、医師、看護師だけでなく、ケアマネジャー、介護ヘルパー、ソーシャルワーカー、臨床心理士らも加わります」

「でも死は扱えない。死後の世界とある程度つながっていないと、人は死にきれないし、大切な人の死を受け止めきれない。宗教者が入ってくれると力になると思っています、数年前から宗



おかべ・たけし 1950年生まれ、栃木県出身。東北大学医学部卒。医学博士。専門は呼吸器外科。宮城県立がんセンター勤務などを経て、97年、宮城県名取市で在宅ホスピスケア専門の岡部医院を開業。現在、医療法人社団爽秋会理事長。

## あの日から

## 看護師が犠牲 お経の力知る

教師を交えた死生学の勉強会をしてきました」

「患者の遺族にとっても、亡くなっていく時間を共にしたことが立ち直りの支えになります。ところが、震災の死者の多くは、医療の手が差し伸べられることのない、いきなりの死でした。そうなることを医者ができることはない。あの世のことを語れる人でないとだめだと痛感しました」

——岡部医院でも、地震の後担当の患者さんを助けに行った看護師さんが津波で亡くなったと聞きました。

「スタッフの動揺がどうにも収まらなかつたのですが、お坊さんをお呼んで観音経をあげてもらおううちに、すうつと落ち着いてきたんです。お経とか祈りの力を身をもって知りました」

——5月半ばから、沿岸部の仮設住宅を訪問して、「心の相談室」のお坊さんたちが被災者の悩みを聞く移動喫茶「カフェ・デ・モンク」の活動が始まりました。

「一緒に行ってみて驚いたのは、お坊さんの人気ぶり。私からみると若くて頼りなさげでも頭丸めてる人の周りに集まるんですね。その青年がまた、実に

## 語る人

「心の相談室」室長

岡部 健さん

## 苦境に寄り添う「臨床宗教師」を

的確な答え方をしている。お坊さんの力というものを正直、見直しました」

「カフェではキーキを持っていて無料で出します。当時は食事も配給でキーキなんて出ないから、すごく喜ばれた。ある時、キーキが足りなくなると、お坊さんがたまたま何も書いていない位牌があるから配ろうという。私はそれはまずいんじゃないかと思ったのに、出したら、わあっと人が群がったんです。お数珠もそう。涙を流して受け取っていく。宗派が違ってもいいから、お経をあげて欲しいという人もいます」

「そういうものを求める気持ちだが、人々の中に奥深くある。そんな霊的な欲求を受け止める力が、いまの日本にあまりにも欠けています」

——そのための人材を養成していく計画がそうですね。

「教えを説くのではなく、相手が求めているものを聞き取るには訓練がいります。あくまで被災者・患者側に立つ姿勢を明確にしよ」と「臨床宗教師」と名付けました。これからの日本社会にとっても必要になります。その人材を被災地で育てたいのです」(聞き手・伊佐恭子)